

イデックスオイルレポート ~For a week~

2022/8/5作成 (株)新出光

【概況】<米国景気低迷による原油及びガソリン在庫増>

●29日、石油輸出国機構(OPEC)加盟・非加盟の産油国で構成する「OPECプラス」は8月3日に会合を開き、9月の生産方針について協議します。ロイター通信が複数の関係筋の話として伝えたところによると、大半が現行水準への据え置きを見込み、小幅増産が検討されるとの意見は少数派だったとの事です。西側諸国の働きかけにもかかわらず、追加増産が実現する公算は大きくないとの思惑から買い膨らみ、相場は98.62ドルへ小幅上げとなりました。

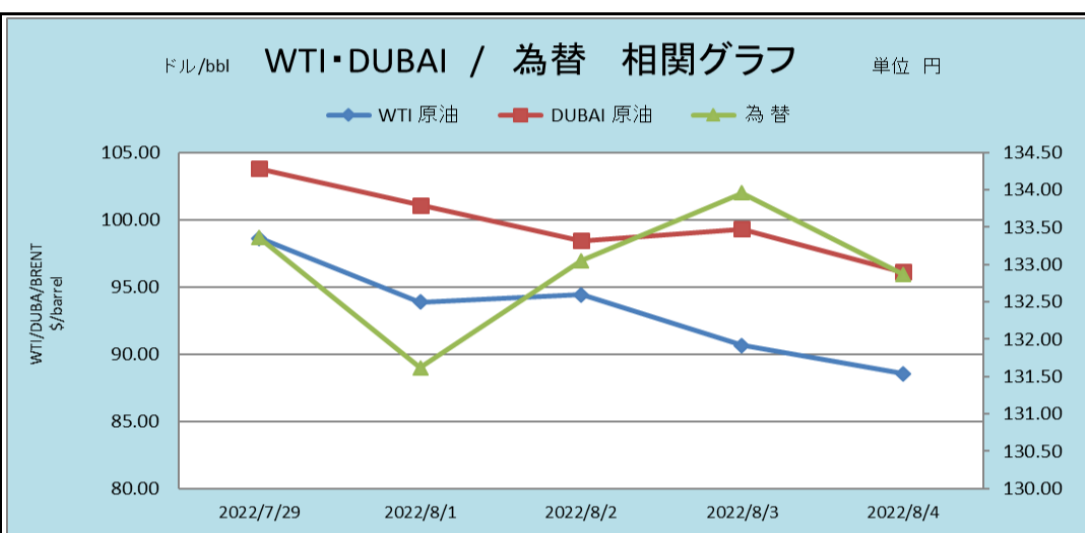
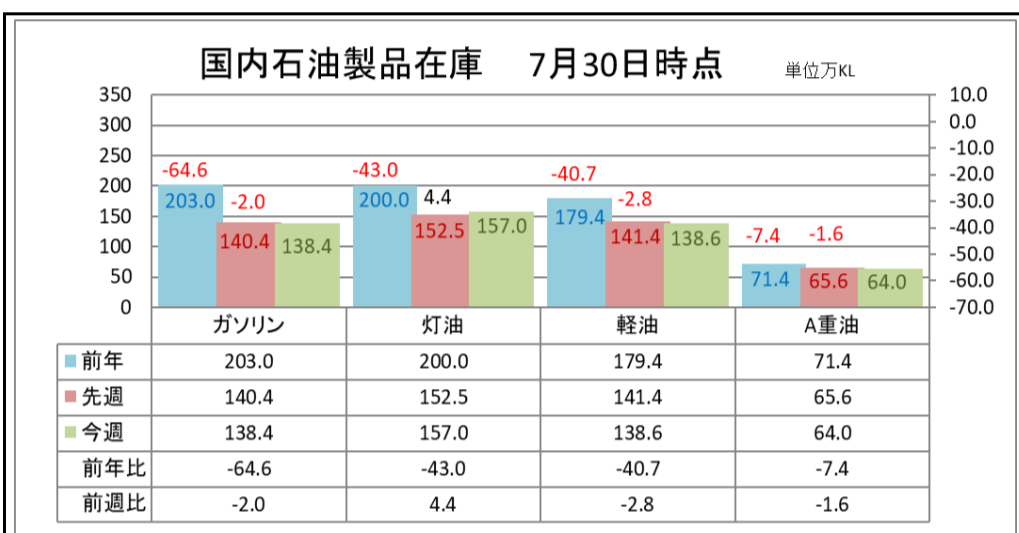
●1日、中国国家统计局が週末に発表した7月の同国製造業購買担当者景況指数(PMI)は49.0となり、景気の拡大・縮小を判断する節目の50を2カ月ぶりに下回りました。週明け1日に中国メディアの財新と米S&Pグローバルが公表した同月の中国製造業PMIは50.4と前月から1.3ポイント悪化。厳格な新型コロナウイルス対策を受けた需要の低迷が明白になりました。石油需要の先行き不透明感であり、世界的な景気後退懸念を背景に売りが膨らみ原油相場は93.89ドルへ下落しました。

●2日、米メディアによると、9月の生産方針に関する協議の結果、現行水準が維持される公算が大きいとみる関係者が多く、国際市場の需給逼迫は続きそうだとの思惑が買いを促し相場は94.42ドルへ反発しました。

●3日、米エネルギー情報局(EIA)が発表した週間在庫統計では、原油在庫が前週比450万バレル増と、市場予想(ロイター通信調べ)の60万バレル減に反して大幅な積み増しとなりました。さらに夏の行楽シーズンにもかかわらず、ガソリン在庫も20万バレル増(同予想160万バレル減)となりました。リセッション(景気後退)懸念が広がる中、エネルギー需要見直しにも警戒感が広がり、原油が売られ相場は90.66ドルへ下落しました。

●4日、米エネルギー情報局(EIA)が前日公表した原油とガソリン在庫は、ともに予想に反して増加。ガソリン消費が増加する夏の行楽シーズンにもかかわらず、ガソリン在庫が積み増しとなったことで米国内需給の緩みが意識されました。また、欧米を中心とした世界的な景気後退(リセッション)の可能性への警戒感も、売り圧力につながり相場は88.54ドルへ下落しました。

7月29日 17:00現在 WTI原油 89.25ドル 為替 1ドル 134.02円



	次回元売変動予測	
	8/11~	元売変動予測
ガソリン	→	-2.9
灯油	→	-2.9
軽油	→	-2.9
A重油	→	-2.9
LSA	→	-2.9

※原油コスト「-8.5円」
 ※激変緩和補助金「-32.1円」
 ※現時点での予測です。

【製品卸価格】<8月2週目は元売月間玉や市況連動玉の販売が強まる>

【今週】今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは、「+1.5円」、補助金は、「-37.7円」、都合「+2.8円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの25日時点の小売価格平均は169.9円となっております。

今週は、元売週間玉が市場をリードしています。今月のコストがまだ見えないため市況連動玉や元売月間玉は様子見をしています。次回の値上げ改定後の4日以降に販売を強化してくる見込みです。

【8月6日以降】次回の元売り改定は、原油コストは、「-8.5円」の値下げ改定予測で、激変緩和補助金は「-32.1円」の見込みで、都合「-2.9円」の値下げ改定の予測となっています。4日の価格改定以降、元売月間玉と市況連動玉も売り込みを始めました。原油価格の下落により次回の値下げ改定が見えており月間コストも見えてきたため今週が、売り時と見て元売月間玉と市況連動玉は、販売を強めています。11日の改定以降は、再び元売週間玉が強くなる見込みのため月間玉は、10日までにある程度、枠消化にメドをつけるべく販売を強化しており、日毎に市況は、下落しています。特にガソリンについては、益明け以降に輸入玉が入ってくるとの情報があるため早めの枠消化を狙い各社販売を強化しています。中間留分については、ENEOS堺、水島の装置不調や元売が増枠を認めていないため各油種タイトな状況は、続くものと思われます。

【次世代エネルギー】<旭川高専と住友化学、ターコイズ水素製造の工業化を加速>

国立高等専門学校機構旭川工業高等専門学校と住友化学株式会社は、環境負荷の低いターコイズ水素製造の工業化に向け、触媒探索と製造プロセスの確立および副産物である固体炭素の用途開発について、共同研究を加速するとの事です。水素は、化学製品の原料として使われるほか、プラスチックのケミカルリサイクルにおける原料や、燃焼しても二酸化炭素(CO2)を排出しない次世代エネルギー源として、今後ますます重要となります。水素の製造方法のうち、温室効果ガス(GHG)の一種であるメタンの熱分解により得られる水素はターコイズ水素と呼ばれ、この製法では、副産物としてカーボンナノチューブなど利用価値の高い固体炭素が得られます。一方で、メタンの熱分解には膨大な熱を与える必要があることから、効率的な熱伝達が課題となっています。旭川高専と住友化学は、2019年から熱伝達効率に優れたマイクロ波と触媒を用いたターコイズ水素の製造について共同研究を行っています。これまでに研究室レベルでの実験により、流動層反応器を用いたマイクロ波加熱による水素製造に成功しています。これにより固体炭素の連続的抜き出しが原理的に可能となるため、工業化を加速する重要な成果と考えています。今後、旭川高専は、反応の収率向上を目指し触媒探索を行うとともに、固体炭素の用途開発に向けた物性評価などを行い、住友化学は、旭川高専と共同で開発する触媒の製造や流動層を用いた反応プロセスの確立を進めより高効率な水素製造プロセスの工業化を加速します。

[出典] ① <https://www.sumitomo-chem.co.jp/news/detail/20220630.html>